

— 各地域でのユーザ会の概要を教えてください。

**渡邊:** タイは、2012年11月に始めましたから、もう6年近くになります。毎年3回開催しており、当日の基本的な枠組みとしては、海外拠点のマネジメントを務める日本人向けのセッションと、現地スタッフであるタイ人向けのセッションを並行して進め、最後は全員が合流しての懇親会を開くといった流れです。内容とタイミング次第ですが、毎回6～10社から、日本人が10～15名、タイ人がその倍くらい参加するイメージです。

**内田:** インドネシアは準備会をやった後、2016年3月に第1回を開催して正式にスタートを切りました。ユーザ同士がうまくコミュニケーションできる場を提供し、そこで何らかのメリットを感じてくれるように知恵を絞っています。誰か1人でも「来て良かったよ」と言葉をかけていただけると、やって良かったと心から思うし、次への活力にもつながります。

**渡邊:** タイに進出している企業の場合だと、同じ工業団地に拠点を構える企業の集まりとか、バンコク日本人商工会議所(JCC)の集まりとか、いくつかのコミュニティがあるんですが、私どものユーザ会のように、業種とか地域に関係なくネットワーク作りができる場が少ないようで、そこに魅力を感じてもらっているようです。

— どんな話題が盛り上がるんでしょう？

**内田:** マネジメント上の問題から製品関連の最新情報まで、様々なテーマでセッションを企画しますが、とりわけ日本人の参加者にとっては、共通の悩みとか課題を本音ベースで議論できるテーマだと俄然熱気を帯びますね。

**渡邊:** タイでは、最初の何年間かは「OKY(お前、ここに来て、やってみろ)」で盛り上がりました。海外拠点に配属された方々には、本社に対して何らかの不平不満がくすぶっているのが通例で、誰かが口火を切ると、共同戦線はれるぐらいに意見が一致するんです(笑)。

**内田:** 分かるなあ。インドネシアでも同じようなことがありますよ。

**渡邊:** でも、傷口を舐め合うような場では意味ないじゃないですか。ある時、アジア進出に詳しいコンサルタントを招いて、現法のマネジメントの巧拙をテーマに講演してもらいました。結論の一つとして、現地スタッフへの仕事の切り出し方や指示の出し方に大きな問題があるとの指摘があったんです。それまで本社は現法のことを分かっていないの—

点張りだったんだけど、実は自分達は現地スタッフのことを分かっていないという構図に気付いて「眼からウロコだったよ」という感想を何人もの方に頂きました。そういう意味で、我々が強く意識しているのは「気晴らしの場」ではなく「学びの場」です。

— システムの使いこなしを議論することもある？

**渡邊:** はい。日々のオペレーションを担う現地スタッフを対象としたセッションではテクニカルな話題を取り扱うことも多いですね。一方、日本人セッションでは、システムを導入した

ことにより見えるようになったデータをどのように活用しているか皆さん関心があり、各社の苦労話、成功体験などの共有は大変盛り上がります。

**内田:** タイにしてもインドネシアにしても、そこに拠点を構える製造業という括りで見れば、それほど大きな世界ではありません。さらにmcframeという共通項があれば、売り手と買い手という関係を越えた“仲間感”が

生まれるのは自然のこと。だからこそ、我々にとって、自分たちが関わった会社や工場がうまく回り成長していく姿を見るのが何よりの幸せなんです。

**渡邊:** ユーザ会は、そうした至福の時をどんどん増やす礎となるわけですから、これからも益々活性化させていきますよ。期待しててください。

## 海外に広がるユーザ会の輪

アジア地域を手始めに本格的な活動を始めている海外ユーザ会。タイとインドネシアそれぞれのコミュニティを切り盛りしている2人のリーダーに話を伺った。



東洋ビジネスエンジニアリング・タイ法人の渡邊祐一氏(左)とインドネシア法人の内田雅也氏(右)

### 中国でもユーザ会が始動！

国土が广大で顧客企業が各地に分散しているために運営が難しいのではとの懸念事項があった中国でのユーザ会。しかし、設立を望む声が根強いことから、2017年9月の事前準備会の実施を経て、2018年3月に満を持して正式な活動をスタートさせた。第1回の会場となった上海市内のセミナールーム(書店併設のカフェスタイル)には9社14名のメンバーが集い、工場運営の高度化などをテーマに議論を展開。日本語・中国語、入り乱れての熱気溢れるセッションからは、次回以降も大いに盛り上がるのが予感された。